

井上光晴

文藝春秋

輸送

一九八九年二月十五日 第一刷

定価一三〇〇円

著者 井上光晴

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三十三
電話 東京(二六五)二二二一

印刷 大日本印刷
製本 加藤製本

*万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

©Mitsuharu Inoue 1989

Printed in Japan

ISBN4-16-310800-9

輸 送〈目次〉

第一章 輸 送 5

第二章 青い空 黄色い日 75

第三章 クレパス 141

あとがき 202

装帧—司修

輸 送

第一章 輸 送

1

工作船のウインチで引上げられる池上画廊のライトバンが、海面に姿をあらわすのを彼は見ていた。一昨日夜の墜落「事故」からすれば、如何にも機敏な処置だと思われたが、それだけ画廊主であった運転者の運命に対するマスコミの関心が、突発的に集中したせいかもしれない。昨日の午後三時、地元といわず中央の民放までが一斉に「夢を買った男の自死」と断定する特集を編成したのだ。

池上桐人は、一九二六年生れの六十五歳。十年前までスペインやポルトガルに居を構えて陶器を作り、かたわら貿易の仕事をしていたらしいが、詳細は不明であった。五十五歳の時帰国して、青山の外れに画廊を開き、イスラエルや中近東の版画を扱って、一時はかなり注目されていた。家族はなし、柿ノ木坂の家には数匹の犬と、世話係に雇われた年寄りの男がいた。

池上画廊が無名の画家や新人のあいだで「質屋」と呼ばれていたのは、自作を担保に低利の金

を一年の期限で借りられたからだ。むろん絵画の質として、一定の水準を必要としたが、殆ど誰彼の区別なく、申し出に少し足りぬ金額を受取ることができたのである。

月日は重なり、池上画廊の細長い収納庫は預った二十号、三十号のカンバスであふれた。期限を過ぎても、殆どの者が受出しにこなかったのだ。一昨年（一九八九年）の秋、池上桐人は画廊をたたみ、しばらく消息を絶っていたが、今年の新春、横浜の埠頭に並ぶ古い倉庫を会場にして〈無名展〉を開いた。すべて「質流れ」の絵画であったが、展示された作品は何と百一点。

しかし、終ってみれば何とも無残な数値だけが残された。六日間の会期を通じてたった百人余の来客しかなく、一点の赤札も貼られなかったのである。出品画の作者たちは例外なく、ひとりも会場にあらわれなかった。

「そう急なカーブでもなかとに、ハンドルを切れんやったのかなあ」

「ハンドルがどうこうという話じゃなかとやろうが。自分で飛込んどるとやけんな」

「自殺かどうか、まだはつきりしとらんとやなかとね」

「テレビでいうとったたい。載せられるだけの絵を積んどるのが何より証拠だつて。……恥の上乗りみたいな絵を自分と一緒に、海に沈めてしまおうとしたとか、そげんふうに話しとったじゃなかね」

「しかし、なしてまた東京からわざわざこがんだ鄙な土地まできて飛込まねはいかんとやろうか。

おいはどうもそこところが解けんと。……死ぬつもりなら、ほかにいくらでも場所はあるとやからね」

御厨長平は人だかりを離れて、暖竹の葉に被われたガードレールに片足をかけた。すると思いがけぬ方向から顔見知りの男がすうっと近づいてきた。福岡の地方新聞で働く社会部記者だ。

「御厨刑事のおでましとなると、何だか匂ってきますね。殺しても絡んでるんですか」

「そんなじゃないさ。通りがかりに見物してるんだよ、ただ」

「通りがかりにね、なるほど。……」

「おもしろい物は何もでないよ」

「御厨刑事に会えただけでも収穫ですよ」

「そういうんだったらそんなふうにおくんだな。でも外れの責任は取らないぜ」

「匂いだけでも嗅がして下さいよ。仁義は守ります」

「匂いも何もないんだよ、ほんとなんだ。事故か自殺か、どっちにしたって、大したあれじゃない。疑うんだったらライトパンにずっとへばりついてればいいさ。僕はさよならするよ、すぐに」

「でも、偶然通りかかったというわけじゃないでしょう。それだけの理由があって……」

「偶然なんだよ、それが。プライベートの用向きでドライブしていたんだ」

「原発ですか、用向きっていうのは」

「どうして原発になるんだい」

「通り道だからですよ。……あそこ今、いろんな問題を抱えてますからね」

「プライベートだといってるだろ。原発なんて関係ないよ」

「怒らないで下さいよ。こっちも仕事なんだから」

「怒ってなんかないさ。……じゃ、失礼するよ」

御厨長平は食堂脇の駐車場まで歩いて、フェスティバを発進させた。かなり手荒く乗り廻しているが、相性がよいのかこれまで故障らしい故障を起こしたことがない。用向きは原発かときいた新聞記者の勘に内心驚きながら、彼は注意深く白い対向車をかわした。

四日前の日曜日から、釜浦漁港の商人宿に彼が滞在していたのは、小港棧橋の近くにある田川食堂を監視探索して、密告の真偽を確かめるためであった。ここ数年、北九州市や福岡市のデパートや大手マーケットを荒らし廻る窃盗集団のアジトをたれこむ者がいたのだ。電話口の声は女性で、ききとれぬ位に低く喉にかかっていたという。

「わかめうどん」という看板をだした箱型の二階家食堂には、二人の男が住み、かつ働いていた。どちらも六十代ぎりぎりか、七十代に入ったと思われる年齢で、うどんをざるに掬い上げる手つきや、テーブルに運ぶ足どりは老けた顔に似合わずきびきびした動きをみせた。

ライトバンが海に突込んだ日の午後と昨日の晩、彼はその食堂に行った。様子を窺ったせいもあったが、客はかなりたて込んでいて、大半がトラックの長距離運転手か助手であるらしかった。店構えに格別これという特徴はなく、わかめうどんもまあまあの味といえた。わかめ入りのうどんではなく、わかめの粉をうどん玉に混入したもので、薄緑のうどんを二、三度すすればきつと飽きがくるだろうと思われた。

トラブルというより、ちょいとした諍いは、昨晚彼の目の前で起きた。客のひとりが一旦受け皿に取った玉子と厚揚げのおでんを一皿まるまる残したのである。「どうも腹加減のわるうして、手つけてなかとぼってんね」という一言に、空皿を運ぶ男が「よかですよ、おでんの分は」といいながら、ごみ入れにぽんと中身を捨てたのだ。むっとした顔つきでおでんの代金を払おうとする客を、もうひとりの男がひたすら取りなし、それはそれですんだのだが、後手で閉められた戸の強い響きはしばらく残った。

田川食堂に対する周囲の評判は可もなく不可もなく、特に親しく付合っている人も見当らなかつた。二人の男については筑豊の炭鉱町出身だと大半の者が信じており、「あん人たちは夫婦のごとしてくらしとらすとよ」という者がひとりいた。牛乳と灯油を扱う店の四十歳ばかりの妻女で、彼が釜浦滞在中に挙げた唯一の得点だともいえた。溝口佳代と名乗る女は、外から戻ってきた狸に似た黒茶のぶち猫をいきなり抱きしめると、それまで誰かが語らなかつた事実関係を、先

廻りするような口調で喋ったのである。保険会社の調査を装った彼の質問にこたえて。

「……ほかにもう一軒、うどんか豚汁定食のドライブインのできたら、あの店は一ヶ月と持たずにつぶれてしまう。あたしはずっと以前からそう考えとったんよ。……なぜかといえば、あそこにおる人は、何かしらん心の店に向いとらんとよね。儲けても損しても、どうでもよかというふうな商売をしとる。あたしにはそうとしか思えんとよ。……何時だったか、二年ばかり前に、牛乳とウーロン茶をおいてくれませんか頼みに行つたことがあるとすよ。よそから仕入れる値段の五分引きでおかせて貰うし、ウーロン茶は銘柄こそ違え、十パーセントも安か条件だったとに、それをあつさり断わつてしまふとだから。理由は契約しとるとだから今更どうにもならん的一点張り。契約は一年契約じゃなかとすか、それなら、それが切れてからでも構いませんとというのに、首を横に振るばかりだったもんね。本気で商売をしとるのかと、怒鳴りつけたいぐらの気持でしたよ。……」

女はまた、こうも話した。

「あそこが何とか今日まで持ちこたえられたのは、伊王島輸送のおかげよ。どがんふうなつながりになつとるのかしらんとばつてん、伊王島のトラックはみんなあそこに停りよるもんね。近頃はあなた、原発のキャスクまで、狭か駐車場をいっぱい占領しとるとすよ。原発から十分か十五分ばかりしか経つとらんのに、なしてわざわざ田川食堂で腹ごしらえせんといかんのか、何

かしら妙な気持になりますでしょうが。……」

「キャスクって、何ですか」

牛乳店のふとった赤ら顔の女は、心持ち明るい表情を浮かべた。

「トレーラーの積んどる鋼鉄のコンテナをキャスクというんですよ。今はもう、トレーラーやトラックのことをこの辺じゃキャスクというとりましますばってんね。……原発で燃やしたあとの灰を捨てに行くという話ですたい」

たれこみの中身は、週に一度か十日に一度、バター連の五人組が田川食堂に集まるというのであったが、溝口佳代の受けこたえはそのことにも触れていた。

「……何人かは知らんとぼってん、炭鉱で働いとった時の仲間うちが入れかわり、たずねてくるのは、ほんなことですよ。……いいえ、みんな年寄りばかり。あたしの記憶じゃ若いものの顔はひとりも見ませんでしたね」

老人のみのバター連か。上司へ報告する内容の中で整理しながら、御厨長平は舌打ちした。前方を行くバスが意地悪く道を空けてくれないのだ。意地悪といえ、今日西海原子力発電所で応対にでた職員も、最初から反感でも抱くような、先の尖ったにべもない言葉を並べた。伊王島燃料輸送と田川食堂のあいだに、食事をだす契約でもあるのか、というそれだけの問いに対して。「……伊王島輸送がどんな契約をしているのか、当方としては関知しません。あなたのいわれる

使用済み燃料輸送車については、運転手が任意の時間、任意の食堂で食事することを認めていません。小港棧橋の田川食堂に輸送車が停車していたというのは、間違いか錯覚だと思います。

類似のトラックやトレーラーはたくさんいますからね。……伊王島輸送に関連した問題は、直接、そちらにおき下さい。……」

花崎幸男、六十八歳。家族は妻（死亡）と長男の宗春、三十八歳。（唐津市在住、製網会社社員）本籍、佐世保市今福町。羽生二正、六十九歳。家族、係累なし。本籍、福岡市西新町。……二人の前職は不明。噂されるように、筑豊の炭鉱で働いていたか否かも不明。直接本人に当るか、長男にたずねるわけではないのだが、事件の性質上、それは外してある。

田川食堂に関するそれだけの調査結果と、牛乳屋の女の証言では入れかわりたずねてくる男たちは年寄りばかり。「滞在中、五人組らしき容疑者はひとりもあらわれませんでした」という報告を、主任や課長はどんな顔をして受入れるだろうか。

二月の海は、黄色っぽい雲の下で、やる気もなくひろがり、幾艘かの漁船がしみついたように浮いている。妻の雛子と何もかもがうまく行かなくなつたのは、何時頃からか。釜浦出張の朝も、予定の日数さえきこうとせず、娘の葉子に「今日、車使えないわよ」といったきりであった。

横浜の大学で同級生だった雛子は、もっと別の人生とコースを彼に期待していたのだろう。警察学校に入学した時はとりたてて不機嫌ではなかったのだから、何時まで経ってもうだつの上